

「人・農地プラン」の推進を目的とした 集落の現状把握と話し合いの推進

対象名 野洲市内 53 集落

【普及活動のねらい】

近年の担い手の高齢化や後継者不足などに対応するため、集落が抱える人と農地の問題を解決する「人・農地プランの実質化」※が求められています。

「人・農地プランの実質化」には、「5年後、10年後の集落の農地を誰が担っていくのか」、「誰に農地を集積・集約していくのか」についての議論が必要であり、今年度はいくつかの集落を選定して、関係機関と連携して話し合いの促進を支援しました。

※「人・農地プランの実質化」…対象地区において、アンケートの実施、現状把握、中心経営体への農地の集約化に関する将来方針の作成の3つが行われていることを指します。

【普及活動の経過】

① 戦略推進会議での検討

市、JA および農業委員会が参加する戦略推進会議を月に1度開催し、現状把握や調査集落の選定などを継続的に協議し、関係機関と課題の共有を行いました。

② アンケート調査による集落状況の把握

全集落の中から、人・農地プランの未実質化集落や関係機関の協議により必要と思われた28集落を選定し、集落状況を把握するためのアンケート調査を行いました。

③ 聞き取り調査による現状と今後の意向の確認

アンケート結果を受け、調査の必要性があると判断した10集落において、対面による聞き取りを行いました。

【普及活動の成果】

聞き取り調査の結果、半分に当たる5集落において、人手が足りていないこと、また5～10年後に営農組織を解散する可能性がある集落が3集落もある現状が分かりました。これをふまえ、集落組織の維持だけでなく、継続が困難な地域において、どのように農地を守っていくかについて早急に検討する必要があることを関係機関で共有できました。

当課では、法人化等の組織継続に向けた取組の支援や担い手に管理を受託してもらえ環境整備などについて、今後も集落での話し合いの推進を行っていきます。(執筆者：山本)

◎対象の意見

5～10年先を考えると組織を継続できるか不安がある。地域の農地を守れるよう支援をしていただきたい。
(野洲市内集落M)

～集落営農状況調査アンケート～

近年、農業を取り巻く環境は大きく変化しており、地域農業の担い手である生産者の皆様においては、今後の営農に向けて不安や課題を感じられていることと伺います。
今回のアンケートでは、そうした担い手の皆様の意見を把握させていただきたいと思っております。ご回答内容は、今後の集落などご反映し、皆さまの営農活動がより良い方向へ向かいためのお力添えができればと思っております。
大変お忙しいところ恐縮ですが、アンケート調査にご協力いただけますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

1. 集落および組織の現状について

① 組織(集落)名			
② 集落農地面積	ha		
③ 集落内耕作放棄地の有無	有 (ha) / 無し		
④ 組織の専従員は居りますか?	人		
⑤ 専従の交代は計画的に行われていますか?	人		
⑥ 専従の人手で作業は困難な行っていますか?	<input type="checkbox"/> 実施できている	<input type="checkbox"/> 実施できていない	
⑦ 専従の人手で作業は困難な行っていますか?	<input type="checkbox"/> 困難ない	<input type="checkbox"/> 少し足りない	<input type="checkbox"/> 全く足りない
⑧ 集落内の作業は計画的に行っていますか?	<input type="checkbox"/> 計画的にできている	<input type="checkbox"/> 計画的にできていない	
⑨ 集落内で集約の更新は計画的に行っていますか?	<input type="checkbox"/> 実施できている	<input type="checkbox"/> 実施できていない	
⑩ 集落内で集約の更新は計画的に行っていますか?	L 実施できていない(集約した方は、我が集落に帰りますか?)		

2. 集落および組織の今後について

① 5～10年先、組織の経営継続はどうか見えていますか?	<input type="checkbox"/> 減少する	<input type="checkbox"/> 現状から変わらない	<input type="checkbox"/> 増加する
② 5～10年先、組織の運営は困難はないですか?	<input type="checkbox"/> 問題ない	<input type="checkbox"/> 少し不安がある	<input type="checkbox"/> 不安に不安がある
③ 5～10年先、集落の運営は困難はないですか?	<input type="checkbox"/> 不安がある(不安の原因を教えてください)	<input type="checkbox"/> 不安がある(不安の原因を教えてください)	<input type="checkbox"/> 不安がある(不安の原因を教えてください)
④ 5～10年先、集落の運営は困難はないですか?	<input type="checkbox"/> 不安がある(不安の原因を教えてください)	<input type="checkbox"/> 不安がある(不安の原因を教えてください)	<input type="checkbox"/> 不安がある(不安の原因を教えてください)
⑤ 5～10年先、集落の運営は困難はないですか?	<input type="checkbox"/> 不安がある(不安の原因を教えてください)	<input type="checkbox"/> 不安がある(不安の原因を教えてください)	<input type="checkbox"/> 不安がある(不安の原因を教えてください)
⑥ 5～10年先、集落の運営は困難はないですか?	<input type="checkbox"/> 不安がある(不安の原因を教えてください)	<input type="checkbox"/> 不安がある(不安の原因を教えてください)	<input type="checkbox"/> 不安がある(不安の原因を教えてください)
⑦ 5～10年先、集落の運営は困難はないですか?	<input type="checkbox"/> 不安がある(不安の原因を教えてください)	<input type="checkbox"/> 不安がある(不安の原因を教えてください)	<input type="checkbox"/> 不安がある(不安の原因を教えてください)
⑧ 5～10年先、集落の運営は困難はないですか?	<input type="checkbox"/> 不安がある(不安の原因を教えてください)	<input type="checkbox"/> 不安がある(不安の原因を教えてください)	<input type="checkbox"/> 不安がある(不安の原因を教えてください)
⑨ 5～10年先、集落の運営は困難はないですか?	<input type="checkbox"/> 不安がある(不安の原因を教えてください)	<input type="checkbox"/> 不安がある(不安の原因を教えてください)	<input type="checkbox"/> 不安がある(不安の原因を教えてください)
⑩ 5～10年先、集落の運営は困難はないですか?	<input type="checkbox"/> 不安がある(不安の原因を教えてください)	<input type="checkbox"/> 不安がある(不安の原因を教えてください)	<input type="checkbox"/> 不安がある(不安の原因を教えてください)

実施したアンケート

リンドウ栽培の定着で中山間地域を活性化する

対象名（かつらがわ大津市葛川まちづくり協議会 特産育成部会 6名）

【普及活動のねらい】

大津市葛川地域は、国道 367 号線（通称 鯖街道）沿いに 8 集落が点在し、人口が 230 名、65 歳以上の高齢者が 54% を占める中山間地域です。

令和元年度、県の「やまの健康」事業を活用し、地域活性化の一手段として、獣害に強いリンドウ栽培に着手され、10 品種、3,500 本の苗が定植されました。

【普及活動の経過】

リンドウは獣害に強いのですが、栽培には十分な土壌水分と肥料が必要です。しかし、当地の土壌は、保水力も保肥力も非常に弱いため、それに適した栽培方法の確立に取り組みました。かん水は、マルチの下に点滴チューブを敷設することで省力化を図り、施肥は液体肥料を月 1～2 回、株元に流し込むことで生育量を確保しました。

さらに他府県産地と一線を画すため、用途を仏花専用に絞り、卸売市場を經由し特定の花束加工業者へ販売するルートに JA と連携して構築しました。市場出荷は皆さん初めてのため、加工業者の担当者を招き、収穫調製作業の方法を詳しく説明しました。



出荷直前の目合わせ会にて（7/7）



仏花専用の 45cm 規格での出荷形態

【普及活動の成果】

当初は、卸売市場へ出荷できるようなリンドウが収穫できるのか、皆さん不安に感じておられました。市場からの高評価が得られ、2,864 本、10 万円の販売実績となりました。この他に、JA 直売所等で 4,000 本が販売されました。このことで自信が付き、収穫が本格化する来年度は 1 万本の市場出荷を見込んでいます。また移住されてきた 20 歳代夫婦の加入や、自費で新植用の苗 10 万円分を購入された部会員もおられます。

（執筆：布施）

◎対象の意見

来年からは収穫が本格化しますので、卸売市場への大幅な出荷増を見込んでいます。栽培面での難しさを実感していますが、自信も深まりました。（部会員 N氏）

小麦新品種「びわほなみ」の登場！

【背景】

管内では「農林 61 号」をはじめ、「シロガネコムギ」、「ファイバースノウ」などの麦類品種が作付けされています。しかし、近年、様々な実需者ニーズや既存品種の収量性の低さから製めん適性に優れた多収性品種への転換が求められていました。そこで、農研機構西日本農業研究センターが育成・品種登録された「びわほなみ」（写真左）が収量性や製めん適性に優れた品種として令和 4 年産より当管内の栗東地域で「農林 61 号」から「びわほなみ」に全面切り替えすることとなりました。当課では今年度より「びわほなみ」の生産者を対象に品種に適した栽培方法について支援を開始しました。



(左) 「びわほなみ」
(右) 「農林 61 号」

【びわほなみの特性と栽培上の注意点について】

●品種の特性：早生で製粉性が優れる「中国 153 号」と晩生で多収と製めん性に優れる「北見 81 号」を交配・選抜を重ねたものが「びわほなみ」です。「びわほなみ」と「農林 61 号」を比較すると、収量性が高い、稈長が短く倒伏しにくい、製めん適性に優れる等の良い特性を持つ一方で、赤かび病に弱く、子実タンパク含有率が低下しやすいなどの特性もあります（表）。また、白ふで芒が短く、*播性が「I」であることも特徴的です。

品種名	出穂期 (月/日)	成熟期 (月/日)	稈長 (cm)	穂数 (本/m ²)	収穫量 (kg/10a)	倒伏程度 (0-5)	赤かび病 耐病性	子実タンパ ク含有率 (%)	硝子粒率 (%)	外観品質 (1-6)
びわほなみ	4/8	5/29	80	561	464	0	弱	9.7	44.4	3.8
農林 61 号	4/16	6/4	88	467	421	0.3	中	10.4	24.3	3.7

●栽培上の留意点：「びわほなみ」は①子実タンパク含有率が低下しやすいこと ②赤かび病に弱いこと ③早期は種は凍霜害のリスクが高まることから、栽培上で注意が必要です。

対策として、①子実タンパク含有率については適切な実肥施用を行い、タンパク含有率を向上させていくこと ②赤かび病においては 2 回防除が必須で、開花期に雨が続いた場合には 3 回の防除を行うこと ③凍霜害を避けるため、11 月 10 日以降のは種を原則とし、従来よりもは種時期を遅らせることが必要となります。

(※播性「I」の品種は、早播きすると出穂が早まり凍霜害に遭いやすくなります。)

特定外来生物「オオバナミズキンバイ」 の対策について

【背景】

「オオバナミズキンバイ（以下、本種）」は南アメリカ原産の多年草で、本県において琵琶湖や水路などでの繁殖が問題となっている難防除雑草です。令和3年8月、草津市の水田で県内初の“ほ場内発生”が確認されました。このため、当課では関係機関と連携し、本種の特徴や対処法を地域の農業者等へ周知するとともに、駆除作業を兼ねた研修会を開催しました。駆除作業は手作業での抜き取りとなり、総勢25名の参加があったものの、30aのほ場一枚に40分の作業者時間を要しました。また、その後も草津市内の別のほ場で1件の発生があり対応を行いました。今後もほ場内発生について注意し、関係機関とともに対策支援を実施していきます。



駆除研修会の様子

【オオバナミズキンバイとは】




●オオバナミズキンバイの特徴、類似植物との判別について

オオバナミズキンバイは水生雑草で、湖や河川、水田などの環境で増殖します。6月～10月頃にかけて直径4cmほどの黄色い花をつけます。繁殖力が強く、茎の断片からも根を生やして分布を広げます。よく混同される「ヒレタゴボウ」とは、右図のように花の大きさや形、葉や茎の形状、草丈などが異なるため、本種と区別できます。

●オオバナミズキンバイの駆除方法について

本種は茎から根が生えて増殖するため、刈り払い機など刃物を使った刈り取りは、かえって分布を広げる可能性があります。また発生ほ場で使用したコンバインやトラクターに茎が付着し、他の水田へ拡散することも考えられるため、移動前に機械を洗浄する必要があります。

本種には除草剤の効果が低く、駆除するには植物体が途中でちぎれないように根から抜き取る必要があります。なお、本種は国により「特定外来生物」に指定されており、行政機関の許可なく生きたまま移動することが禁止されています。

オオバナミズキンバイ	ヒレタゴボウ
<p>花</p> 	
<p>葉</p> 	
<ul style="list-style-type: none"> ・花びらは5枚 ・葉は丸く、濃緑色 ・草丈は稲株と同程度かそれ以下 	<ul style="list-style-type: none"> ・花びらは4枚 ・葉はとがり、黄緑色 ・草丈は稲株を越すことが多い

オオバナミズキンバイの判別について

スクミリンゴガイの対策について

【背景】

スクミリンゴガイ（通称：ジャンボタニシ）は、南米原産の貝で、1980年代に食用として国内に持ち込まれたものが野生化し、イネを食害する有害生物として主に九州地方を中心に問題視されています（写真、図）。

本種は、移植直後のイネの柔らかい葉を好んで食害します。多発ほ場では欠株を生じ、場合により植え直しを余儀なくされることもあります。

県内では野洲市を中心に発生および被害が見られます。近年の温暖化で越冬しやすくなり、個体数・発生地域は拡大傾向にあると思われています。



写真 スクミリンゴガイ

【スクミリンゴガイ対策について】

令和2年度から、当課と県病害虫防除所が連携し野洲市4集落にスクミリンゴガイの防除技術実証ほを設置し、「冬期耕うん」、「農薬散布」、「浅水管理」に取り組みました。

「冬期耕うん」では、厳冬期前（12月頃）に低速でロータリー耕うんを行うことで、越冬のために土中に潜っている貝を破砕するとともに、寒風にさらして殺貝することができました。「農薬散布」では、移植直後と移植4週間後（分けつ初期）に誘引効果のある農薬を散布することで食害を防止できました。また、「浅水管理」では移植後の水深を4cm以下に保つことで、イネへの食害を抑制できることが分かりました。

この結果をもとに「スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）防除対策マニュアル」が作成され、滋賀県病害虫防除所のホームページに公開されました。

次年度は、本マニュアルを活用し、各地域でのスクミリンゴガイ対策の普及に努めていきます。



図 スクミリンゴガイと在来タニシの見分け方

実需者・JA と連携した加工原料出荷の取組

【背景】

イチゴ栽培において、厳寒期に低温に当たることで白ろう果や不受精果が発生するなど、正規品として出荷できない果実が発生することがあります。また、栽培終盤には、果実が熟するのが早く、収穫しきれず廃棄されてしまうこともあります。正規品として出荷できないこれらのイチゴは、B品として出荷されたり、廃棄されたりしていました。

令和2年12月に、実需者から当課に、このような果実を活用して缶酎ハイを製造したいという相談がありました。そこで当課では、加工原料イチゴの集出荷・加工・販売への取組を生産者とJAレーク滋賀に働きかけ、実現に向けて支援しました。



完成した缶酎ハイ

【取組内容】

当課、JAからの働きかけにより、JAレーク滋賀管内のイチゴ生産者6名が、加工原料としての出荷に取り組まれることとなりました。令和3年5月、作の終了時に発生する非正規品のイチゴに加え、コロナ禍で行き先をなくしたイチゴや、今回の主旨に賛同し滋賀県のイチゴを盛り上げたいという生産者のイチゴ、合計約1tが集荷されました。このイチゴからは、その後実需者の関連の加工業者により約9万本の缶酎ハイが生産されました。

令和3年12月16日、完成した「滋賀県産いちごのチューハイ」の販売が開始されました。当日は、(株)平和堂社長(写真中央)、JAレーク滋賀理事長(写真右)、当事務所長の小森(写真左)が出席し、消費者に向けて缶酎ハイと滋賀県産イチゴのPRを行い、メディアにも大きく取り上げられました。また、この取組をきっかけに、今後の滋賀県園芸の方針について三者による意見交換を行いました。

令和4年には、5月の生果の集荷に加えて、厳寒期に出た非正規品のイチゴを冷凍したものも集荷し、1.5tの集荷を目指します。今後は酎ハイだけでなく、新たな加工品の開発も予定されています。

生産者と実需者の利害が一致し、継続的な取組が可能な出荷体制の構築を支援していきます。



販売開始イベントでの県産イチゴとチューハイのPR

栗東市チャレンジ農業塾の運営を支援！

【背景】

栗東市では農業者の高齢化や減少、都市化等による農地の減少等により、農業の持続的な発展が課題となっていました。そこで、県、市、JA、農業委員会、栗東市農業振興会などの関係機関が連携し、栗東市の農業振興と新規就農者の育成などを目的に、令和2年に「栗東市チャレンジ農業塾」が創設・開講されました。農業塾にはミニトマト、イチジク、キク、ブドウ、カーネーションの計5コースがあり、1年間を通して生産・販売に関する技術・知識の習得を図ることができます。今年度は以下の3コースで7名が受講されました。



ブドウの摘粒・袋掛けの研修会

【活動内容】

当課は主に受講生の栽培技術・知識の習得支援を目的に下記の活動を行いました。

①ミニトマトコースの支援

2名が受講されました。第1回は、栽培管理の基礎として座学研修を行いました。第2回以降は指導農業士〇氏のハウスをお借りし、現地実習を実施しました。は種から育苗管理に始まり、定植準備、定植、定植後の整枝作業やホルモン処理などの栽培管理を受講生に経験してもらいました。2名とも不明点はすぐ〇氏に確認し、熱心に管理され、無事9月末から収穫が始まりました。

②カーネーションコースの支援

1名が受講されました。加温設備のある190㎡のビニールハウスに、発泡スチロール製のプランターを332個並べ、6品種、2,000本の購入苗を6月に定植し、塾がスタートしました。摘心後の株の仕立て方、病虫害防除、液肥の管理、摘蕾について、講義と実習を組み合わせ、4回の講座を開催しました。10月中旬から収穫が始まったカーネーションはJA直売所でも好評であり、今後複合経営の1品目として取組拡大が期待されます。

③ブドウコースの支援

4名（うち2名は本年新植済み）が受講されました。第1回は座学研修、第2回～第5回は守山市のベテラン農業者や県農業技術振興センター（花・果樹研究部）の協力を得て、各ほ場で摘粒や袋掛け（写真）、品質調査、棚作り、せん定等の研修を行いました。次年度の房づくり・ジベレリン処理研修をもって基本的な1年間の管理技術習得支援が終了します。現在、1名がブドウの新植の希望を示されており、今後も引き続き支援していきます。

高病原性鳥インフルエンザ等の発生を見据えた 防疫対応マニュアルの整備

【背景】

昨年度、全国的に高病原性鳥インフルエンザが続発する中で、本県でも初めて発生が認められ、防疫措置が実施されました。今後の管内での発生に備えて、南部管内では県地方機関や各市等からなる南部地域家畜防疫対策会議が設置されており、当所は情報共有や会議開催運営などの役割を担っています。この構成メンバーは、有事の際には現地対策本部として対策にあたることになっています。

現在管内には6戸の養鶏農家があります。それぞれ飼養規模は概して小規模ですが、鶏舎近隣には民家が存在しており、ひとたび発生すると住民不安が急に大きくなることが危惧されます。こうした事態に備え、関係機関、関係団体がスムーズに防疫対応に動きだせるようにマニュアル整備をしました。



作成した防疫マニュアル

【活動内容】

養鶏農家の営農地は市街地から農村地域と幅広く、農場ごとに立地条件（周辺民家、道路、農場の敷地等の状況）が異なります。そのような中で適切な作業規模で農場に見合った対応を実現できるよう、今年度に各農場における防疫対応の見直しをすすめました。また、消毒ポイントの設置の際には、各候補地の理解と承認を得るため、管理者への訪問・説明を実施しました。いずれの消毒ポイント候補地の管理者にも趣旨を理解いただいた上で、協力的な声をいただきました。発生時には計画している7つの消毒ポイントは迅速に設置できるものと考えています。

いうまでもなく、高病原性鳥インフルエンザを発生させないための日頃の衛生管理が最も大切ですが、不測の事態の際には迅速に対処できるよう日頃から関係機関や団体とともに準備をしています。



南部地域家畜防疫対策会議における説明

管内青年農業者クラブの活動支援

【大津地域青年農業者クラブ^{きらり}季楽里の活動支援について】

同クラブは毎年、大津市木戸小学校と連携し、稲作についての授業を行っています。コロナ禍でも、先生やクラブ員の「子どもたちに日々のご飯が食卓に届くまでを知ってほしい」という想いにより、今年も5月（田植え）と10月（収穫）の2回、開催できました。5月は、現地での田植え作業の様子をオンラインでつなぎ、学校にいるクラブ員がリアルタイムで説明しました。映像だけでなく学校で実際に水稻苗の現物を見てもらうなどの工夫もしました。子供たちからは多くの質問が出され、農業について関心を持ってもらうことができました。

また、クラブ員の農産物を多くの方に知ってもらいたいとの思いから、新たに大津プリンスホテルと連携した農産物マルシェにも取り組みました。

当課は、これらの企画の打ち合わせから、資料の作成や当日の運営等が円滑に進むよう支援しました。その他、県内視察やプロジェクト活動の支援も行いました。



小学校での説明の様子



マルシェの様子

【南びわこ青年農業者連合会の活動支援について】

同連合会は今年度、県内の視察研修や情報発信などの活動に力をいれて支援しました。

視察研修では、野洲市に工場のある(株)関司穀粉を訪問し、米粉の製粉技術を学ぶとともに、工場を見学しました。米粉を使ったパンを試食したところ、クラブ員から「自分が栽培した米でパンを作り、ジャム等の自社の加工品と共にPRしてみたい」など意欲的な声が聞かれました。

また、新規クラブ員の確保を目的に同連合会の取組活動の紹介パンフレットの作成やSNSを活用したクラブ活動の情報発信を始めました。

当課ではこの他、連合会の県内外の先進経営体への視察や勉強会、プロジェクト活動等の支援も行いました。



視察研修の様子



作成したパンフレット

表彰事業 受賞者の紹介

令和3年春の叙勲 旭日単光章 草津市 中島 富治一さん

草津市北山田地区で青ネギの生産や刻みネギの加工・販売などを担う株式会社「アグリケーション」の会長を務められています。46歳の時、家業の農業を継ぎ、同法人を立ち上げられました。少量でも毎日食べるネギに注目し、土づくりにこだわった「養土育」ブランドを展開されています。刻みネギの加工品は県内大手スーパーと契約販売し、今では年間売上高の9割超を占めるまでに成長しています。「今後もおいしいネギを安定的に供給したい。」と意欲的に話されています。



第80回中日農業賞 農林水産大臣賞 野洲市 北中 良幸さん



野洲市で株式会社「きたなかふあーむ」を設立し44棟、約2.8haのハウスでキュウリ、コマツナ、ホウレンソウを栽培されています。キュウリ栽培は全国有数規模の面積を誇り、高い収益性をあげておられます。また、外国人研修生や障がい者など多様な人材を採用されています。「会社の在り方が認められうれしく思う。農業の魅力を突き詰めて、発信していきたい。」と目を輝かせておられます。

滋賀県農林水産表彰 功労賞 大津市 岩田 康子さん

大津市で無農薬にこだわったブルーベリー栽培、ジャム加工やレストラン開設などに取り組む有限会社「ブルベリーフィールズ紀伊國屋」を経営されています。また、いち早く6次産業化に取り組み、今までの経験やノウハウを農業者や女性起業者に伝え、新たな農業経営のロールモデルとして長年活躍されてきました。

「これからも、食の大切さや農業のよさを若者や消費者に伝えていきたい。」と話されています。



発信情報

【大津・南部の農業】

農業と農政に関する情報をお知らせする当課の広報紙「大津・南部の農業」（A4版4ページ、約15,000部/回）を年間3回発行しています。

詳細は当課のホームページをご覧ください。



【普及現地情報】

当課が取り組む普及指導活動を「普及現地情報」として下記のホームページで発信しています。今年度は11件の記事を掲載しました（1月7日時点）。

当課HP：<http://www.pref.shiga.lg.jp/ippan/shigotosangyou/nougyou/ryutsuu/18662.html>



【Facebook】

当所の活動や管内の魅力的な農業・農村情報をFacebookで発信しております。普及現地情報よりも身近な内容になっております。アカウントをお持ちでない方も閲覧可能ですので、ぜひ、ご覧ください。

当所 Facebook：<https://www.facebook.com/facetoagri.o.n/>



活動体制

普及指導係

参事	課長補佐	副参事	主幹	副主幹	主査	主任技師	技師
(1)	(1)	(1)	(1)	(2)	(2)	(2)	(6)

計16名

内訳（専門別担当者数）

作物	野菜	花き	果樹	畜産	獣害	農産物活用	経営
(5)	(6)	(1)	(1)	(2)	(3)	(1)	(1)

※一部兼任あり

令和3年度 大津・南部地域普及活動実績集

令和4年(2022年)3月発行

【編集・発行】

大津・南部農業農村振興事務所農産普及課
滋賀県草津市草津三丁目 14-75

TEL 077-567-5421~23

FAX 077-562-8144

Mail ga35@pref.shiga.lg.jp

【印刷】

〇〇〇〇〇〇〇株式会社